

ISSN 0910-2396

野鳥だより

—北海道—

第 121 号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成12年9月21日

クマゲラ



1999.12.26 野幌森林公園 撮影者 後藤 義民

〒004-0834 札幌市清田区真栄4-2-6-75

佐藤 ひろみ	2
ミヤマガラスが北海道の冬鳥に 広 報 部	4
北海道における繁殖期のカケスの分布	
藤巻 裕蔵	6
仮想体験と実体験 久野 裕之	8
探鳥会ほうこく	9
キマユツメナガセキレイについて	
広 報 部	15
鳥の正しい呼び方 佐藤 正秀	15
探鳥会あんない	16

— 2 —

野に入植、4年後に造田工事が行われています。しかし洪水は絶えることなく続きこの地を豊かな農地という悲願のもと昭和16年学生義勇軍による大学排水路掘削工事が行われました。しかしその後も大洪水は続き農業被害は絶えることはありませんでした。昭和61年から始まり平成6年まで続いた国営かんがい排水事業によりこの付近は大規模な耕地と現在の「長都沼」となったのです。

この人工的に造られた幅広水路に雁類が北帰の途中に立ち寄り、ねぐらをとるようになりました。雁だけではなく3月末から4月にかけてこの長都沼を利用するカモや白鳥はおびただしい数になります。カモ類が、主にオナガガモが多いですが、満々と満ちていてときどきやってくるオオワシや何かに驚いて一斉に飛ぶ様は壮観です。この時季には北へ向かう雁、カモ、白鳥の群れがこの沼の上空をつぎつぎと通っていきダイナミックな北への流れが伺えます。この長都沼は比較的鳥を近くで観察できるのでよい観察ポイントともいえるでしょう。満々というカモの中から多くの種類を見出すこともでき、まさに生きたカモ図鑑ともいえます。種類だけでなくディスプレイ行動などもよく観察することができます。厳冬期にカイツブリを見ることもあります。白鳥たちも次々とやって来ては羽を休め何百羽もの群れが夕方ねぐらをとっては次の中継地へと旅立っているようです。

雁の初認はその年の雪融け状態により3月の上・中旬となります。今までにマガン、ヒシクイ、ハクガン、シジュウカラガン、サカツラガン、コクガンが観察されています。ねぐらをウトナイ湖から宮島沼へ移そうとする途中で一部の雁がこの長都沼をねぐらとして利用しています。今年の春にはマガン、オオヒシクイに混じってハクガンの若鳥とシジュウカラガン7羽もねぐら利用していました。またオオヒシクイの繁殖地などを調査するため雁を保護する会等により昨年の2月に新潟県豊栄市の福島潟で捕獲し発信器を装着した、黄色い首輪のオオヒシクイ数羽が羽を休めていたこともあります。その首輪番号からいったんサロベツへ移動した個体が雪融けがすすんでいなかったためか1週間後にはまたこの長都沼へもどってきたということも判明しています。発信器をつけたオオヒシクイの電波を手がかりに、カムチャツカで初めてオオヒシクイの繁殖が確認できたという報告やテレビ番組も記憶に新しいことです。

2000年3月には用水路から長都沼に流入する土砂の除去

と、土砂浚渫が目的の掘削工事を開発局が行っていました。ちょうどタイミング悪いことに雁の渡来時季と重なり、大型クレーン車やパワーショベルの音に驚いて雁がびくびくしているのを観察しています。中継地利用を放棄するのではないかと不安がつのりました。工事のため2kmの長さの河畔林が1.6km程も伐採されてしまい身を隠す茂みがなくなって道路から姿が露な状態にもなっていました。しかし沼を放棄することなく杞憂に終わりました。ただ今後は河畔林を復元するよう開発局に働きかけていかねばならないでしょう。

この春には確認できた範囲では3月18日から雁が渡来し始め、4月26日までこの沼を利用していました。ここ長都沼では600羽近いオオヒシクイがカウントされることもありますし、26日間もの長期間にわたって滞在していた雁がいることもその標識首輪からわかっています。ねぐら利用する雁の数もかなりのものです。オオヒシクイの行動を見るとヒシの実をむさぼるように食べていることが多々ありました。この原稿を書いている7月末に長都沼へ行ってみましたところ浚渫した場所以外の所でたくさんのヒシが繁茂していました。ガンカモ類の長期滞在をささえている沼の植生と安全な環境とをいつまでも守りつづけることが大切と痛感しています。



長都沼の鳥たち

この長都沼には小さな駐車スペースがあり、その横に屋根付き2階建ての観察台が設置されています。駐車場以外の所に車を乗り入れて鳥を驚かせることがないようにマナーを守って鳥を観察していきたいものです。

〒062-0934

札幌市豊平区平岸4条2丁目3-15-A205

ミヤマガラスが北海道の冬鳥に

かつては西日本にしか渡来しなかったミヤマガラスが、十数年前から東北地方でほぼ定期的な冬鳥となり、そして数年前からは北海道にも渡来してくるようになった。ここでは北海道における最近の記録を紹介するとともに、ミヤマガラスの北海道進出について考えてみる。なお、この記事は野鳥愛護会広報部の佐藤ひろみと樋口孝城が中心となって収集した情報をとりまとめたものである。

西日本から東北へ

今からおよそ34年前の1966年(昭和41年)に発行された「野鳥の事典」(清棲幸保、東京堂出版)のミヤマガラスの項には「燕雀目カラス科カラス属。冬鳥として北九州の農村地帯に毎年渡来するものが多く、南九州の鹿児島県や宮崎県方面にも渡来するものがある。(途中略)この種はまれには本州や四国などにも渡来するものがある。」と書かれており、その渡来は九州にはほぼ限定されていたようであった。それから15年、1981年発行の「日本鳥類図鑑」(高野伸二、東海大学出版会)には、「1979年3月に石川県河北潟で小群」という記載があり、1983年発行の「原色日本鳥類図鑑」(新訂増補版、小林桂助、保育社)には「冬鳥として本州西部・九州・宍粟・対馬に渡来するほか、まれに四国・宮城県・東京・横浜・日光・五島列島・鹿児島県・南大東島などで採集されたことがある。」と記載されていることから、このころには東北地方にまでそろそろ渡来域をひろげつつあったことが読み取られる。

最近、日本野鳥の会山形県支部・宮城県支部の深瀬さんが北日本のミヤマガラス情報をインターネットの個人のホームページ上で公開しているが、そこには「山形県内は1980年前後より渡来が観察されるようになった。最近では冬鳥として定着したため、珍しくなくなったので観察情報も聞かなくなった。宮城県内も山形県に遅れること数年、同じような状態」と書かれており、合わせて東北6県、新潟県、石川県での最近の記録が載せられている。最初に書いた通り、今ではミヤマガラスの渡来は東北地方ではもはや普通のことになったようである。

北海道への渡来

公表された北海道での最初の記録は1994年の利尻島と礼文島のものである(小杉和樹、利尻研究14号、1995、富川徹・小畑淳毅・福岡将之、同号)。利尻島では1994年4月18日から5月3日まで、断続的に最大で16羽、また礼文島では4月30日に8羽となっている。また、これは公表された記録ではないが、道南の小松俊男さ

んは、利尻・礼文での記録よりも少し前の1994年4月10日に函館市近郊の大野平野で11羽を確認したとのことである。小松さんからは越冬記録も含めて近年の記録が寄せられており、2000年発行の「日本の野鳥550、山野の野鳥」(文一総合出版)の中の、「近年越冬分布が日本海沿いに東進しており、東北地方や北海道南部でも越冬している」という記載と結びつくものと考えられる。

初記録が必ずしも初渡来を意味するものではないが、北海道への初渡来は実際に1994年であった可能性が高く、東北地方に遅れることおよそ15年、今から6年前のことであるから、極めて最近といってもいいであろう。

北海道の近年の記録

今回、広報部では北海道での1995年以後のミヤマガラスの記録を個人情報の形でいくつか集めてみたが、ここ2、3年のうちに、地域によってはもはや定期的な冬鳥になった観がある。観察記録を伴って公表されたものは1999年の石狩市の記録(北山、野鳥だより、第115号、1999)しかないが、実際には他地域でもかなり見られていることが明らかになった。記録の信頼性であるが、ミヤマガラスについては、細くて先がとがって見える嘴、成鳥に特有な嘴基部の皮膚裸出部の白などから、ある程度の野鳥観察経験者であれば、類似種ハシボソガラスとの識別は比較的容易であり、たとえ写真などの具体的証拠がなくても疑義が生じる可能性はほとんどないと思われる。

最初に渡来が記録された利尻島と礼文島についてであるが、利尻島では、小杉和樹さん(利尻島自然情報センター)および佐藤雅彦さん(利尻町立博物館)により、以後毎年、3月下旬から4月中旬にかけての渡来が確認されている。ただ、個体数のほとんどが10羽以下であり、多いときでも



ミヤマガラス

鶴川 2000年3月31日 撮影者 長谷川 富昭

個体数については1羽のみの場合から数百羽におよぶ場合がある。大雑把に見ると、函館、伊達、鶴川の太平洋側では100羽単位の群れがしばしば観察されるのに対し、日本海側では100羽を越える群れは稀である。今後、地域と月を関連させての記録収集が必要であろう。

渡来ルート

ミヤマガラスはモンゴル・中國大陸などで繁殖する。かつて西日本などにだけ出現していた頃は、朝鮮半島を経由して九州・本州南部に渡来していたものと考えられていた。しかしながら、近年になって北海道に渡来するものが同じルートを通り、東北を経て北海道に至ると考えるよりは、大陸から直接北海道に渡来するとみなすのが無理のないところであろう。1999年9月25日の豊富町兜沼の例は直接渡来を示唆するものである。ただ、すべてのミヤマガラスが大陸と北海道の行き来と同じルートを通るのか、来る時と戻る時のルートは同じなのか、それとも異なっているのか

などについては、今回寄せられた記録からだけでは推測困難であり、今後の記録の積み重ねが必要である。

今回、いくつかの地域から得られた情報をもとに近年の北海道のミヤマガラス状況を紹介してみたが、実際にはもっと多くの地域にミヤマガラスが飛来しているものと考えられる。畑地などにカラスが群れていたならば、ミヤマガラスかもしれないという意識をもって観察することを是非お勧めするとともに、目撃記録をお寄せいただけたら幸いである。

最後になったが、文中に名をあげた方々以外からも多くの観察情報をいただいた。ここに個別にお名前はあげないが、それぞれの方々に感謝する。なお、東北地方のミヤマガラス状況についての深瀬さんのホームページのアドレスは以下の通りである。

<http://homepagel.nifty.com/magpie/>

文責：広報部

北海道における繁殖期のカケスの分布

藤 巻 裕 蔵

私の研究テーマの一つは、北海道における鳥類の分布である。調査方法は、北海道全域をほぼ5km四方の区画に区切り、各区画で少なくとも1か所以上2kmの調査路をとり、4月下旬～7月上旬に歩きながら出現する鳥を記録していくものである。1976年以来これまでに約550区画で調査した。この調査結果とその他の論文や調査報告書、日本野鳥の会の各支部の支部報の記録（1970年代以降）を資料として、1回に1種づつ分布について紹介していきたい。

まず、最初はカケスである。北海道に生息するカケスは亜種ミヤマカケスで、森林性の留鳥である。繁殖期には主に山地の森林に生息し、秋から冬にかけては低地にも姿を現すことは知られているが、あまり詳しいことはわかっていない。ここでは、最初に分布について述べ、次に環境ごと、標高ごとの生息状況について述べる。

分 布

私は、前述のように5km四方の区画を単位に記録をとっているが、この区画で分布図を描くと細くなるので、5km四方の区画4個を1区画にまとめ、すなわち10km四方の区画を単位に分布を示すことにする。この区画は、ちょうど1/25000の地形図に相当する。

図1は、10km四方の区画を単位として繁殖期のカケスの分布を示したものである。しかし、北海道北部、渡島半島、オホーツク海側では記録が少ないため、空白部が多く、完



カ ケ ス

全とはいいがたいものである。記録のあるところ、例えば十勝地方と釧路地方について見ると、平野部でもかなり生息していることがうかがえる。

生息環境

生息環境については、ハイマツ林、常緑針葉樹林（人工林も含む）、針広混交林、落葉広葉樹林、カラマツ人工林、農耕地・林（観察路沿いの環境の20%以上が林地の場合）、農耕地、住宅地の8つに区分した。

カケスは、常緑針葉樹林、針広混交林、落葉広葉樹林、カラマツ人工林、農耕地・林、農耕地で観察されたが、住

宅地とハイマツ林では観察されなかった。生息環境別の出現率（全調査路数に対するカケスが出現した調査路の割合）は、森林では28～50%と比較的高かったが、農耕地・林と農耕地では低く、それぞれ19%と7%で、環境によって異なっていた。出現率は、森林のうちではカラマツ人工林で他の3タイプの森林よりやや低く、農耕地では森林のない農耕地の方で低かった（表1）。

標高別でみると、カケスはどの標高帯でも観察されたが、出現率は標高200m以下では17%とあまり高くなく、201～800mでは25%以上となり、801m以上では低くなる傾向が見られた（表1）。

表1. カケスの生息環境別・標高別の出現率

生息環境	調査 路数	標 高 (m)					計
		201～	401～	601～	801～		
		～200	400	600	800		
ハイマツ林	8	—	—	—	—	0	0
常緑針葉樹林	8	100	67	—	50	0	50
針広混交林	80	43	36	38	27	14	35
落葉広葉樹林	65	28	39	46	0	0	34
カラマツ人工林	18	40	22	25	—	—	28
農耕地・林	99	18	26	0	—	—	19
農耕地	113	6	10	0	—	—	7
住宅地	10	0	0	0	—	—	0
計	401	17	26	19	4	1	

生息環境別では森林で出現率が高かったため、カケスがまったく観察されなかったハイマツ林を除く4タイプの森林をまとめて標高別の出現率を見ると、標高200m以下で36%、201～400mで37%、401～600mで39%、601～800mで27%、801m以上で10%で、標高801m以上より600m以下で高い傾向がみられた。

北海道で繁殖するカラス科鳥類には、カケス以外にホシガラス、ハシボソガラス、ハシブトガラスの3種類がいる。ホシガラスは主にハイマツ帯、ハシボソガラスは主に農耕地、ハシブトガラスは主に都市、農耕地、森林に生息している。このうちハシブトガラスはよく高山帯にも飛来することがある。カケスの生息環境は森林で、高山のハイマツ帯に出ることはない。また、低地では農耕地でも見られるが、そこは高木林のあるような環境である。森林のない農耕地では、出現率は非常に少ない。このように、北海道のカラス科鳥類のなかで、カケスは高木林に強く依存している種といえる。

最後に、一言。図1の分布を見ていただくとわかるが、これまで得られた資料からでは完全な分布図を描くことはできない。今後は会員皆さんからの観察記録を追加し、より完全な分布図をめざしたいと考えている。

〒080-8555 帯広市稲田町西2-11

帯広畜産大学野生動物管理学研究室



図1. 北海道における繁殖期のカケスの分布
一つの区画は、10km四方で、1/25000地形図に相当する。
●＝生息が確認された。○＝調査したが、観察されなかった。
▽＝未調査の区画。

仮想体験と実体験

日本自然保護協会自然観察指導員

久野 裕之

先日、友人の家でテレビを観ていたら、「〇〇の夏休み」とか言うテレビゲームのCMが流れてました。森で虫を取ったり、川遊びの仮想体験ができるらしい。

(ついにここまで来たか!)

ほのぼのとしたイメージと裏腹に、いささか嘆きの混じった危機感が、私の胸に沸いてきました。

いったい誰が買うのでしょうか。子供がこんなノスタルジーに浸る訳はありません。親が買い与えるのでしょうか。

ともあれ、自然に直接触れられなくなっているから、このようなゲームが出て来るのでありましょう。

確かに、僕らが子供の頃、普通にあった夏休みの風景は、すでにノスタルジーの世界です。

セミやトンボはまだしも、川で泳いだり魚を獲ったりする楽しみは、かなり遠くになってしまいました。また、そうした遊びをする子供の姿こそが、珍しくなってしまいました。

(これでいいのだろうか?)

テレビという四角い箱の中だけで遊んで、体験したつもりになっているのです。

本物の体験との差は、計り知れません。

ゴツゴツとした木の感触。ジリジリとした日射しを肌に受け、森に入ったときのヒンヤリとした感じ。昆虫のザラザラした足。バタバタと手の中で暴れる羽。草のにおい、木のにおい。様々な鳥の声…。

川の水の冷たさ。流れに逆らって踏んばる足。ゴロゴロとした石…。

自然の中には、様々な生命がそこに生き、様々な刺激をくれます。この多様性こそが、自然の醍醐味なのです。

子供達には、是非この自然を体験してほしい。

アウトドアと称して、車で乗りつけてバーベキューをするだけでなく、自然を肌で感じ、味わえるような人間になってほしい。

考えれば、今の子供は、与えられ過ぎているのではないのでしょうか。遊ぶ物から遊び方まで、大人の作ったものが与えられています。

その一方で、自分で考えるチャンスや、創造するチャンスは、あまり与えられていないのではないかと思います。

自然の中で、のびのびと遊ぶことによって、体も、五感も、頭脳も鍛えられます。好奇心も、ここから発生してくるのではないのでしょうか。

では、その自然はどこにあるのでしょうか。

まだまだ身近にいっぱいあるという見方も、もうほとんど残っていないじゃないかという見方もありますが、とにかく、今あるものしかないのです。これ以上、減ることはあっても、増えることは、まずありません。

みなさんが子供の頃と比べてどうでしょうか。公園の面積は増えこそすれ、昔なじみの生き物たちや遊び場は、確実に減ってきていると感じているはずです。

遠くの自然、それこそ畏敬の念を抱くような自然も大切です。たまにそういう所へ行行って、哲学的になるのもいいことです。

近くの自然、簡単に触れられる自然も大切です。常に生命の営みを見せてくれます。普段着でつきあえるから、ありがたみはあまり感じないかもしれませんが、これを失ったときのダメージは、とても大きいものがあります。生命が無くなるという意味でも、憩いの場が無くなるという意味でも、子供が育つ場を失うという意味でも、その損失は大きいのです。

最近、子供達はどこで遊んでいるのでしょうか?

札幌の北区に、すばらしい公園を見つけました。

大きな木が何本もあり、その下へ行くとなぜかホッとします。森としてはたいして広くないけれど、木の種類は多



アカゲラ

いのです。実の生る木もけっこうあります。下草も多いし、落葉も自然の状態に近くなっています。

森の縁には水辺もあります。人工の川ですが、オタマジャクシや川エビや小さな魚も居ます。もちろん、コンクリートの三面張りではありません。

枯れた木も、残してあります。虫もいろいろ居ます。

鳥もいろいろ来ます。キツツキの食痕もあります。アオサギの巣も増えてきています。チゴハヤブサの番いも、ニセアカシアの梢に止まってました。

歩道は透水性の舗装がしてあり、色も自然の土に似せてあります。

何よりすばらしいのは、子供の歓声があることです。特に水辺から多く聞こえます。

浅くて細い澁んだような川に、あんまり多勢子供が来てたから、オタマジャクシは絶滅してしまうかと心配しましたが、けっこうしぶとく残っていました。

子供達の歓声のすぐそばで、アカゲラやムクドリも営巣していました。

純粋な自然ではないけれど、生命のあふれる森なのです。

こうした公園なり森が、近くにある人は幸福ですね。

精進川では、三面張りのコンクリートを壊して、より自

然に近い川にしたところ、たくさんの生物が戻ってきたそうです。

豊かな自然を後世に残す、そのために今何ができるか……身近なところから始めていきたいものです。

私は、自然観察会を通して、自然のサポーターを増やそうとしています。

“愛護”の気持ちこそ、活動の原点だと思っています。

野鳥愛護会のみなさんのおかげで、私の中にも自然の世界の多様性が、ずいぶん広がってきています。

以前は森を歩いていても“何か鳥が鳴いている”としか思わなかったのが、今では少しずつ聴き分けられるようになり、鳥の姿もイメージできるようになりつつあります。渡りに関しても少しずつわかってきて、地球規模に想いを巡らすようにもなりました。

もともと身の回りに繰り広げられていたことなのに、目も耳も働いていなかったんですね。

自然の中で、気づき、考える……このようなきっかけを作ってくれた探鳥会に感謝するとともに、これからも多くの人を巻き込んで続けていってほしいと思います。

〒064-0806 札幌市中央区南6条西25丁目2-17-313



藤の沢探鳥会 (暖かい陽の光のなかで)

2000. 5. 5

勝 俣 由美子

5月になっても天候不順の日が続く毎日でしたが、その日は朝から快晴で絶好の探鳥日和でした。寒さに弱い私は冬の会にはほとんど参加しないので、この日が最初の参加になりました。白鳥園前に集合していよいよ山登りです。といってもほとんどがハイキングコースで、途中にはエンレイ草、ミズバショウ、ツワブキと春の山野草が咲きほこり、さて目を転じてはまだ葉の出していない木々の梢を見回すとあちらこちらに、これまた春を待ち構えていた山野の鳥たちが盛んにさえずり飛びまわっていました。コゲラ、アカゲラ、キセキレイ、ツグミたち、カラの仲間などなど。その他では、ウグイスも姿こそ確認できませんでしたが、もう一人前に立派なさえずりでした。小1時間ほどで頂上につきここでも又青い空の中に鳥たちの姿を追い求め、見つけた鳥たちの名を話し合い望遠鏡を覗かせてもらいながら楽しいひとときでした。登りとは別のコースで急勾配のところもありましたが、全員無事に元の白鳥園まで下山できました。暖かい陽の光の中で和気あいあい、それぞれが持参した昼食を食べ最後に鳥あわせをしました。なんと31

種類もの数になりました。私はたった6種類しか見つけることができませんでしたけれども。

このまま帰るのがもったいないようなよく晴れた暖かい陽の光の中を満たされた心で帰途につきました。

最後に、共に参加した夫のつたない短歌を記します。

①水色のえぞ延胡索の花ゆるる「小鳥の村」の
谷間の五月

②「ヒ、フー」と口笛のごと鶯^{うす}の声、さつきの青き
空に響かう

③熊^{くま}啄^{まげ}木鳥の冬の命を支えたる、孔五つ見ゆ
立ち枯し樹に

④淡く黄になにわずの花咲きいでて、姿を見せぬ
鶯を聞く

⑤「鳥あわせ」おわりしときに青空を、すいと
日^ひ雀^{がら}は人をこえゆく

〒004-0867 札幌市清田区北野7条5丁目2-7

【記録された鳥】トビ、ハイタカ、キジバト、コゲラ、アカゲラ、キセキレイ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、トラツグミ、クロツグミ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、エナガ、ハシブトガラ、コガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、メジロ、ホオジロ、アオジ、カワラヒワ、ウソ、シメ、ニュウナイスズメ、スズメ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上31種

【参加者】大滝和磨・洋子、勝俣征也・由美子、犬飼 弘、中正憲佑・弘子、樋口孝城・陽子、山田良造、品川睦生、

戸津高保・以知子、松原寛直・敏子、武沢和義・佐知子、
小堀煌治、阿部早苗、後藤義民、高辻弘美、高栗 勇、早
坂泰夫・みどり、岩崎孝博、白澤昌彦・大町欽子、村上和
子、青池道子、板田孝弘、井上公雄 以上31名

【担当幹事】小堀煌治、早坂泰夫

野幌森林公園

2000. 5. 7 長尾 由美子

今にも雨が降り出しそうな空を恨めしく思いつつ一大決心をして、新聞の記事を頼りに大沢口に向かいました。吹く風が冷たく、どんな一日になるのだろうと心細い限りでした。けれど、歩きはじめるうちに青空が顔を出し陽ざしが暖くなり、皆様が、初めての私に大変丁寧に教え下さり、楽しく過ごさせて戴きました事、本当に有難うございました。夫の勤務先の関係で、以前大変お世話になりました井上公雄さんに数年振りで、この様な場所で偶然お会いしまして、本当に大変な驚きと嬉しさでした。「自然」の取り持つ縁、人との出会いの不思議さと素晴らしさに思いを致しました。

深川の田舎に育った私は、「自然」は当たり前のものとして、取りたてて興味をもつものではありませんでした。そんな私が、一年程前からでしょうか、友に誘われ、近くの山や森に行く様になり、それが、段々と面白くなってきました。枯草の中の赤いツル竜胆、一滴の水がせせらぎとなり森を潤しゆく仕組みなど、忘れてしまったことを思い出させてくれるようでした。しかし、反対に、自分は昔、何度も見ている知っているはずの、草や木などの名前を何も知っていないことに気づきました。見なれているはずの鳥でさえ、いざ、名前を聞かれても答えられないのです。

井上さんが「誰でも一度では覚えられないのですから……」とおっしゃって下さいましたので、皆様と、ご一緒させて頂いて少しづつ勉強してゆきたいと思っております。雀にも種類がある事を知り、又、何種類かのエンレイソウの、可憐で気品のある花にひかれました。花が緑色の緑二輪草も見ることができましたが、一人では、到底気づかないことでしょう。よく聞いていた「ヒメイチゲ」をはじめとする事ができ、小さくても芯のある印象でした。ゴジュウカラ、カイツブリ、オシドリなど、鳥もおもしろいですね。鳥のさえずりで鳥名が判かり、木や花をよく観察されて、私には驚いたり感心することの連続でした。

これからは、この会の行事にできる限り参加させて頂きたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願い致します。

〒004-0880 札幌市清田区平岡10条1丁目21-5

【記録された鳥】カイツブリ、トビ、オシドリ、マガモ、キンクロハジロ、オオジシギ、キジバト、コゲラ、アカゲ

ラ、ヤマゲラ、キセキレイ、ヒヨドリ、コマドリ、クロツグミ、ヤブサメ、ウグイス、エゾムシクイ、センダイムシクイ、キクイタダキ、キビタキ、オオルリ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、メジロ、アオジ、カワラヒワ、イカル、ニュウナイスズメ、カケス、ハシブトガラス、ツバメsp.

以上36種

【参加者】長尾由美子、吉田美子、内田 孝、広木朋子、岸谷美恵子・皓平、沢田浩一・路子、鈴木繁雄・英子、三船喜克・幸子、松原寛直・敏子、蒲澤鉄太郎・則子、今野弘、早坂泰夫、川上秀幸、吉田 功、今村三枝子、山口和夫、大賀 浩、西村博伸、山田英子、霜村耕介、鎌田玲子、斉藤正雄、横山加奈子、山川美香、栗林宏三、佐々木裕、勝部 勝、品川睦生、菅間慧一、成澤里美、吉田慶子、大町欽子、後藤義民、大滝洋子、大西典子、小川 空、岩崎孝博、鈴木克司、井上公雄 以上45名

【担当幹事】井上公雄、後藤義民

千歳川周辺早朝探鳥会

2000. 5. 14 内田 孝

探鳥会との出会いは、3年前の新聞の催事広告でした。それまで私は、野鳥といえば、スズメとカラスくらいしか知りませんでした。

今回、はじめて千歳川周辺の探鳥会に参加させていただきました。苔におおわれた大木に、わずかに新緑の葉が見えかくれする森林を、川に沿って歩きました。朝霧と小雨の中にコブシやサクラもくすんで、今一つ精彩がありません。しかし、鳥たちのひびき合う声が、森の深さを教えてくれるようなすばらしい森です。

“ヤマセミ!”の声にハッとした私の視界には、白い直線が川面にそって走っただけでした。幹事の方からのお話で分かったことですが、警戒心の強いヤマセミが木に止まっているところを観察するのは非常に難しいそうです。おそらくヤマセミの気持ちとしては、“私の庭先に現れたちん客”を一目見ようと、観察行動を決行したのでしょう。その後も何度か目にすることができました。それがヤマセミとの出会いでした。そして、清流と深い森とひんやりとした朝霧とともに忘れることのできない感動が、一つ加わったのでした。

印象に残る出会いはそう多くはありません。また、一人では、なかなか発見できません。鳥ばかりでなく、草花や木に深い関心を持つ方々の貴重なお話をうかがいながら、自然の中に身を置くことは、とてもすばらしいことです。今まで見落としてきたことが数多くあることに、いつも驚かされます。愛護会の方々が、野鳥を通して、自然と人との関わり方の大切さを教えてくれているような気がします。

これからよろしくお願い致します。

〒006-0801 札幌市西区発寒1条2丁目7-1

【記録された鳥】トビ、オシドリ、マガモ、キンクロハジロ、キジバト、ツツドリ、ヤマセミ、コゲラ、ヤマゲラ、イワツバメ、キセキレイ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、トラツグミ、クロツグミ、ヤブサメ、ウグイス、エゾムシクイ、センダイムシクイ、オオルリ、コサメビタキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、アオジ、カワラヒワ、ベニマシコ、ニュウナイスズメ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス

以上35種

【参加者】佐々木充人、勝俣征也、世永、邊見トモ子、渡辺千春、沢部 勝、川崎賢一、大町欽子、岩崎孝博、戸津高保・以知子、永島良郎・トキ江、くのひろゆき、鈴木繁雄・英子、栗林宏三、内田 孝、久田伸一、鷲田善幸、道場 優、高橋利道

以上22名

【担当幹事】栗林宏三、永島良郎

春の鵲川探鳥会

2000. 5. 21 成 澤 里 美

湿った曇天。牧場は数日来的大雨でぬかるみ、春の鵲川に長靴は欠かせない。水場の川も水位が増している。以前よりかなり広くなったようだ。川中にすっきりとアオサギが1羽。スコープの視界を小鳥のシルエットが飛び交う。むこうの岸辺にシギらしい中型鳥。「何かいますよ。ソリハシギかな〜。」額から嘴先にかけて少し上に反っているように見えた。キアシシギと判明。直感・思い込みは禁物。もっと近付きたい。灰色の空を大型の鳥影が横切る。「何だ? チュウシャクかな?」後に続くように「ピピピピ」特徴的なチュウシャクシギの声だ。

牧場沿いの叢から茶色っぽい小鳥が飛び立つ。下面は白。双眼鏡で追うが入らず、もどかしい。ヒバリが時折足もとから飛ぶが、派手な囀は少ない。曇天のせいだろうか。杭の上にノビタキ。黒い頭の雄だが、くすんだ茶褐色で胸の橙も薄く貧相。若いのだろうか。角度をわずかに上げたスコープにショウドウツバメの乱舞が入る。

川に沿い河口にむかって進む。対岸の砂州にダイゼン。顔から胸腹へと真っ黒。白さも引き立つツートンカラーのシックな夏羽。メダイチドリ・トウネンも2〜3羽チョコチョコ歩いている。メダイチドリは橙エプロンが薄く、雌。トウネンは遠目にも赤味が強く、夏羽。シロチドリもいる。頭の橙色があざやか。まん丸な白い顔に目と嘴がポチッと黒い。けっこうきかなそうな顔だ。

河口付近にオオセグロカモメが群れている。幼鳥も多数混じる。見なれた鳥だが、悠々と飛ぶ白い姿は、やはり美しいと思う。ウミネコは少数。シロカモメの若鳥がいた。

白さが際立っているのは、3年目の春だから? ユリカモメが10羽前後かたまっている。オオセグロカモメの群中では、2まわりほど小柄。黒頭巾・白アイリングがユニークでかわいい。

排水路の辺りをコサギがゆっくり歩いている。浅い水を透かして足指の黄色があざやかだ。突然カモメ類が飛び立ち騒ぐ。上空にチュウビ。これだ! カラスと争っている。1羽は茶色味が強く、もう1羽は頭から肩が白っぽい。やがて牧場奥の草原に降りる。時折低空を旋回しながらも去っては行かない。この辺りで営巣しているのだろう。

「そろそろ引き上げますよ。」の幹事さんの声にも、皆さん去り難い様子。自然にたっぷり浸らせていただき、何とか土砂降り前に鳥見を終えた春の鵲川でした。

〒002-8001 札幌市北区太平1条1丁目1-1-701

【記録された鳥】ウミウ、アオサギ、コサギ、トビ、チュウビ、マガモ、ダイゼン、コチドリ、シロチドリ、メダイチドリ、チュウシャクシギ、ツルシギ、イソシギ、キアシシギ、オオジシギ、トウネン、ウミネコ、オオセグロカモメ、シロカモメ、ユリカモメ、ミツユビカモメ、キジバト、ヒバリ、ショウドウツバメ、ハクセキレイ、ノビタキ、アカハラ、オオヨシキリ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト

以上35種

【参加者】高橋良直、北山政人、勝見輝夫・真知子、三船喜克・幸子、邊見トモ子、佐藤幸典、戸津高保・以知子、小山内恵子、松原寛直・敏子、西川孝義、山田良造、樋口孝城・陽子、佐々木充人、山口和夫、森田崇司、長尾由美子、くのひろゆき、成澤里美、梅津、大友三成、鈴木昭二、藤谷節子、品川陸生

以上28名

【担当幹事】山田良造、樋口孝城

植苗の探鳥会に参加して

2000. 6. 4 佐 藤 まさ子

まずは、他の会に参加予定の遅刻した私を快く仲間に入れて親切にして下さった事と、雨が止んだ事に感謝を申し上げます。

(感想): 場所は“植苗ウトナイ湖”で草原の鳥が勢揃いをして、お出迎いでした。目的の「シマアオジ」に逢えてその鮮やかな黄色は今も忘れられません。

そして、目の上が白黒の縞になっている「コヨシキリ」そして、目前に「コブ白鳥」とツーショットでいた「オオジュリン」は何度も同じ場所にきていましたね。あれは、多分彼のテリトリーなのかな。私はどの野鳥も初めて見せて頂いて感動していました。

(意見): あっ!! 「イワツバメ」と言った時に横にいた人が、親切に「ショウドウツバメ」ですよお腹の白い部分の違

いを教えてくださいました。初めての私はなかなか声をかけて聞いて良いやら迷っていたのでとても嬉しかったです。これから続けて下さい。

(希望)：私は千歳在住なので「この辺は良いところですね」と言われてなんだかとっても気分が良かったです。是非、何度でも足を運んで下さい。

(提案)：鳥たちのためにも“感動”は心でしませんか？

言葉にして口に出すときは小さな声にしませんか？ 私のような者が生意気ですが、ふっとそう思ったので“一筆啓上”させて頂きました。

ちなみに、私のテープでは「ほほじろ」の聞きなしは「一筆啓上仕候」とありました。ほほは白くありませんが、このような機会を与えて下さった事に心よりお礼を申し上げます。ありがとうございました。

〒066-0017 千歳市日の出5丁目12-5

【記録された鳥】アオサギ、トビ、コブハクチョウ、オオジシギ、キジバト、カッコウ、ツツドリ、アマツバメ、コゲラ、ヒバリ、ショウドウツバメ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ノゴマ、ノビタキ、クロツグミ、アカハラ、ヤブサメ、ウグイス、エゾセンニュウ、コヨシキリ、センダイムシクイ、キビタキ、シジウカラ、ホオアカ、シマアオジ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、ベニマシコ、イカル、ニュウナイスズメ、スズメ、ハシブトガラス

以上35種

【参加者】石岡宗子、蒲澤鉄太郎・則子、後藤義民、小堀煌治、佐藤正秀、サトウセイコ、佐藤まさ子、世永正明、高橋良直、高橋利道、田中哲郎、中正憲信、樋口孝城・陽子、樋口歌子、広木朋子、藤原和子・信彦、邊見トモ子、マカベスズコ、松田ハル子、松原寛直・敏子、三浦敏靖、三船喜克・幸子、村上トヨ、森田崇司、森田紀美子、山下和子、山田良造、山本昌子、雪田昭治・久子 以上35名

【担当幹事】三船幸子、山田良造

東米里探鳥会にて

2000. 6.11 鬼丸順子

さわやかな6月の風が吹く中、私は10年以上前に参加させて頂いたことを思い出しながら歩いていました。愛護会の皆さんは、時間にゆとりをもって鳥のみならず草花も楽しんでいらっしゃいますね。

今回は息子も成長して長い時間歩いてもついてこれるようになったので、ゆっくりと見ることができとてもたすかりました。最後尾の方も急がされることなく鳥の数を競う姿勢があまりなかったのがよかったです。

他の会の探鳥会では珍しい鳥や個体数がせぎにがんばらないと新会員が得られないつらさが伝わってきます。私は日本野鳥の会のカッコウ調査のボランティアも兼ねていた

ので、一週間前の同時刻も東米里でカッコウを何羽か見ましたがたくさんの人と見ると発見が早くていいですね。

チュウビの姿が自分の目で見れなかったのが残念でした。ノゴマや、シマアオジが見れた環境が来るたびに遠くなっていく東米里の風景の中にミズバショウやエゾカンゾウなどの花がいつまで残るのかなと思った日でした。

〒004-0063 札幌市厚別区厚別西3条4丁目3-19

【記録された鳥】アオサギ、トビ、チュウビ、マガモ、キジ、コチドリ、イソシギ、オオジシギ、キジバト、カッコウ、アリスイ、アカゲラ、ヒバリ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ノビタキ、アカハラ、エゾセンニュウ、コヨシキリ、オオヨシキリ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ、コムクドリ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト

以上31種

【参加者】今村三枝子、鈴木繁雄・英子、山口和夫、小堀煌治、小野木弘司・幸子、戸津高保、高橋利道、長尾由美子、岩崎孝博、三船喜克・幸子、蒲澤鉄太郎・則子、松原寛直、品川睦生、渡辺紀久雄、鈴木克司、中正憲信・弘子、犬飼 弘、山田甚一・玲子、高橋良直、勝見輝夫・真知子、鬼丸正明・順子・義明

以上30名

【担当幹事】渡辺紀久雄、戸津高保

夜の探鳥会に参加して

2000. 6.17 渡辺千晴

自然観察を始めてようやく半年、の私。始めたのはちょうど鳥の見やすい冬の頃。鳥の名前が少しずつわかるようになってきた今、私の持病の「もっと知りたい病」がひどくなってきてしまった。

そんな中で夜の鳥の声を聞く探鳥会があると知り、迷わず参加。(実はこの日、探鳥会に行くために仕事を早く切り上げさせてもらいました。会社の皆様、ごめんなさい。)

蚊の多そうな場所だから、と市販の虫よけを持参したけれど、ベテランの参加者の方は衣類用の防虫剤やうちわなど、それぞれ工夫をこらしているみたい。うーん、なるほど。これは使えそう。今度私も試してみよう。6時半に会はスタートし、目的の場所まで約30分。その間にもウグイスの声に立ち止まっては耳をすまし、カワガラスがいないか、と川をのぞく。残念ながら現れなかったけれど。夏至間近かということもあってなかなか日が暮れない。お借りしたウチワをパタパタやりつつ、星を数え、ツツドリ達の声聞きながら、夜の森の声が聞こえるのを待つ。

ようやく暗くなった頃、キョキョとヨタカの声。ヨタカらしくないらしいけど、私は初めてだから聞けただけでも感動もの。お願い、もう少し聞かせて、と思いつつ今日はご機嫌ナナメなのか、それ以降は聞かせてくれなかった。

残念ながら御時間が来てしまいました、という幹事さん

の声に、しぶしぶ下山。夜の森の鳥達は今日はみんなしてご機嫌ナナメだったみたい。と思いながらとぼとぼ帰りの道を歩いていると、どこからかブッキョーと声がする。これは何の声？こたえは「コノハズク」。最後に開けてよかったですね。でも私は初めまして、コノハズク。見あげると街なかより少し目線の低いところにまんまるの大きな月。終わり良ければすべて良し。私の初めてづくしは無事終了。教えて頂いた皆さんどうもありがとうございました。そして来年もまたこの子達の声が聞けますように。

〒064-0823 札幌市中央区北3条西30丁目5-6-107

【記録された鳥】 ジュウイチ、ツツドリ、コノハズク、ヨタカ、ハリオアマツバメ、ヒヨドリ、コルリ、マミジロ、アカハラ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、アオジ

以上15種

【参加者】 武沢和義・佐知子、山田甚一、岡本知恵、中正憲信・弘子、勝見輝夫・真知子、渡辺千晴、新妻 博、高橋良直、戸津高保・以知子、齊藤昌子、嶋崎康広、佐藤千恵子、佐々木充人、樋口孝城、久野裕之、岩崎孝博

以上20名

【担当幹事】 中正憲信、戸津高保

福移探鳥会に参加して

2000. 6. 25 吉 田 元 重

大阪生まれの大阪育ち。スズメ・ハト・カラスくらいしか知らなかった私が、野鳥に興味を持ち始めたのは、北海道への転勤がきっかけでした。

旭川に4年、札幌に3年暮らして、いろいろな鳥がいることを知りました。また日頃から山歩きが好きな私は、山や林の中で鳥に出会うのも楽しみにしています。そうになると、草原にはどんな鳥がいるのだろうと知りたくなくて、今回の探鳥会に参加させていただきました。

私の場合、探鳥会は集合場所に行くためのルートや交通機関を調べることから始まります。これも楽しみのひとつ。世界が少し広がる気がします。

探鳥会当日は、雲ひとつない青空。ところがあいにく風の強い日でした。会の方々は、「今日は観察には向いてない。」というようなことをおっしゃってました。本来なら、もっとたくさんの鳥が見られるはずだとのこと。それでも、石狩川の河川敷や堤防付近を飛びかうショウドウツバメをかなり間近に見られたのは収穫でした。日頃目にすることのないオオジュリンやノビタキを見られたのも満足でした。

何よりも、草原の鳥というのはこういう環境のところにいるのだということがわかり、勉強になりました。ただ、以前見られていた鳥が少しずつその姿を減らしているという話を聞くと残念な気がします。鳥たちの住む環境がよりよい状態でいつまでも保ち続けられるようにと願わずには

いられません。

今後も機会を見つけて、探鳥会に参加させていただきたいと思います。ありがとうございました。

〒064-0809 札幌市中央区南9条西18丁目1-30-301

【記録された鳥】 トビ、キジバト、カッコウ、ヒバリ、ショウドウツバメ、ツバメ、ハクセキレイ、モズ、ノゴマ、ノビタキ、エゾセンニュウ、コヨシキリ、オオヨシキリ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、ベニマシコ、スズメ、コムクドリ、ムクドリ、ハシボソガラス、ウズラ

以上23種

【参加者】 吉田元重・久美子、武沢和義、吉田慶子、山田甚一・玲子、蒲澤鉄太郎・則子、樋口孝城・陽子、永島良郎・トキ江、中正憲信・弘子、道場 優・信子、鈴木繁雄・英子、長尾由美子、武田千恵子、品川睦生、犬飼 弘、高橋利道、香川 稔、岩崎孝博、栗林宏三、山田良造、戸津高保、板田孝弘、今村三枝子、横田通典、深谷正男、世永正明、高栗 勇、松原寛直・敏子、井上公雄

以上37名

【担当幹事】 道場 優、永島良郎

サロベツ・ベニヤ探鳥会に参加して

2000. 7. 1~2 三 井 廸 子

7月1日、サロベツ・ベニヤ探鳥会の朝はうす曇り、午前6時半には参加者がぞくぞくとテレビ塔下へと集まり、早速バスへ。渡された資料は旅のルート、花園のマップ、参加者の名簿、予定表等役立つものばかりです。今回の旅は以前からは是非行きたかった場所で参加出来たのは、本当に幸運でした。バスは浦臼、留萌を経て穏やかな日本海を見ながら北上し、金浦原生花園で探鳥が始まりました。ここでは花はあまり見られませんがオオジシギを観察しました。遠別富士見のハマナスの咲く緑地で昼食の後、次のサロベツ原野パーキングでは皆さんに教えられ、オオジシギ、カワラヒワ、ノゴマを観察しました。原野の中で鳥を見つけること、双眼鏡に入れることも初心者の中には難しいのですが、望遠鏡でノゴマを見せてもらい、喉の赤いのを見たときは感激しました。海岸線を走るバスからはトビ、ウミネコも見えました。いよいよ幌延のビジターセンターに続く原生花園に入ります。湿原にはヒオウギアヤメ、エゾカンゾウ、トキソウ、ツルコケモモ、沼にはコウホネが浮き、幻想的な風景です。しきりにウグイスの声が出て、ノゴマ、オオジュリンを観察し、望遠鏡に入ったアカエリカイツブリを見ることが出来ました。ここからバスで数分の沼で幸運にもアカエリカイツブリが水に潜っては浮く様子を観察できました。次にサロベツ原野に到着、(キマユ) ツメナガセキレイを観察する皆さんと別れて、エゾカンゾウが地平まで群生する広大な湿原を歩きました、360度さえぎるものがない原野に立った時は感動しました。終着地

のクッチャロ湖畔の浜頓別ウイングは快適な宿で、懇親会も和やかに1日目の行程を終えました。翌早朝、小雨の中を探鳥に出かけ、ウグイスの声を聞きながら道走るセキレイ、湖を飛ぶ鴨を観察しましたが、私の知識では種類迄は特定出来ません。朝食後二階の窓から望遠鏡に入ったビンズイを見せてもらい、水鳥観察館へ。ここでベニヤの花と鳥について詳しい講演を聞き、とても参考になりました。ベニヤ花園では2羽の(キマユ)ツメナガセキレイを、羽色の淡い方は幼鳥らしいとのこと。上空にトビが舞いカワラヒワやオオジュリンも見ました。花園にはセンダイハギ、カンゾウ、クガイソウ、ワタスゲ等を観察し、多くの鳥と花に出会えて自然の大きさを知った楽しい旅でした。細やかに企画とお世話を下さった蒲澤さんと幹事の方、又皆様の御親切に感謝致します。

064-0951 札幌市中央区宮の森1条9丁目3-18

【記録された鳥】

7月1日(遠別町)金浦原生花園、富士見道の駅付近
ウミウ、アオサギ、トビ、イソシギ、オオジシギ、ウミネコ、キジバト、ヒバリ、ハクセキレイ、モズ、ノゴマ、ノビタキ、エゾセンニュウ、シマセンニュウ、マキノセンニュウ、コヨシキリ、ホオアカ、オオジュリン、カワラヒワ、ベニマシコ、ニュウナイスズメ、スズメ、ムクドリ

以上23種

(幌延町)サロベツ原野パーキング、幌延ビジターセンター
下サロベツ原野探勝路・長沼、三日月沼
アカエリカイツブリ、ウミウ、アオサギ、トビ、マガモ、オオジシギ、キジバト、カッコウ、ハリオアマツバメ、ヒバリ、ノゴマ、ノビタキ、ウグイス、エゾセンニュウ、シマセンニュウ、マキノセンニュウ、コヨシキリ、シマアオ

ジ、オオジュリン、カワラヒワ、ニュウナイスズメ、スズメ、ハシボソガラス

以上23種

(豊富町)サロベツ原野ビジターセンター原生花園付近
トビ、チュウヒ、オオジシギ、キジバト、カッコウ、ヒバリ、ショウドウツバメ、ツメナガセキレイ、ノビタキ、シマセンニュウ、マキノセンニュウ、シマアオジ、オオジュリン、カワラヒワ、ハシボソガラス

以上15種

7月2日(浜頓別町)クッチャロ湖畔早朝自由探鳥

・ベニヤ原生花園

アオサギ、トビ、マガモ、オオジシギ、ウミネコ、カモメ、ユリカモメ、キジバト、カッコウ、ツツドリ、フクロウ、ヒバリ、ツメナガセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ビンズイ、モズ、ノゴマ、ノビタキ、アカハラ、ウグイス、エゾセンニュウ、シマセンニュウ、マキノセンニュウ、コヨシキリ、センダイムシクイ、キビタキ、ハシブトガラ、ヒガラ、シマアオジ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、ベニマシコ、ニュウナイスズメ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス

以上38種

【参加者】石橋和子、井上公雄、板田孝弘、右近和子、大町欽子、大西典子、蒲澤鉄太郎・則子、片山 実・慶子、鎌田玲子、加藤花子、岸田由美子、近藤綾子、小堀煌治、佐藤典子、斎藤昌子、信田洋子、清水朋子、白澤昌彦、志田博明・政子、高栗 勇、戸津高保・以知子、中正憲佑・弘子、長尾由美子、西永幸恵、新妻 博、広木朋子、藤岡郷子、邊見トモ子、松原寛直・敏子、道場 優・信子、三井廸子、村上トヨ、村田静穂、山田良造、山本昌子、山田甚一・レイ子、山口和夫、横山加奈子、池田みちえ、井川修二、高辻弘美

以上49名

【担当幹事】蒲澤鉄太郎、清水朋子、山田良造



探鳥会報告 ベニヤ・サロベツ

—— キマユツメナガセキレイについて ——

サロベツ原野などの春を彩るキマユツメナガセキレイですが、実はその名は既になくなっていました。ツメナガセキレイについての種と亜種は以前は次のようになっていました。

種ツメナガセキレイ

亜種マミジロツメナガセキレイ

亜種キマユツメナガセキレイ

亜種キタツメナガセキレイ

ところが、日本鳥学会によ

る新しい日本産鳥類リストの

作成に伴い、1997年に右のよ

うに変更になりました。

種ツメナガセキレイ

亜種マミジロツメナガセキレイ

亜種ツメナガセキレイ

亜種キタツメナガセキレイ

これは、日本に2亜種以上が存在する場合には、日本で繁殖する亜種、もしくはいちばん普通の越冬亜種の和名は種の和名と同じとし、その他の亜種にそれぞれ別の亜種名を与えるという原則に準じて、キマユツメナガセキレイという亜種名が、種名と同じツメナガセキレイに変更されたためです。

キマユツメナガセキレイはもともと亜種名だったのですが、その名自体がなくなってしまいました。1997年以降に出版された図鑑などではキマユツメナガセキレイという記載の無いものが多くなってきています。どうぞご注意ください。

(広 報 部)

鳥 の 正 し い 呼 び 方

苫小牧市 佐 藤 正 秀

鳥を観察している時、名前の分からない鳥がいると野鳥図鑑で調べるが、この時、図鑑の鳥の名前は標準和名で掲載されている。この標準和名こそ日本で鳥を呼ぶ名前である。しかし、亜種名と種名を混ぜて呼ぶ人がいるが、その中には亜種名を正式名だと勘違いをしてる人もいる。よく知られ使われている種名と亜種名に、エナガをシマエナガ、カケスをミヤマカケス、ゴジュウカラをシロハラゴジュウカラ等がある。亜種名を正式名と思っている人も大勢いるが、種名が正式な呼び名である。昔は亜種名で呼ぶ時代もあったが今は種名で称呼する。

亜種とは地域による個体差をいう。たとえば北海道の種と本州の種を比べると色や、大きさの違いがある種のことで、著しく違いのある鳥や一般の人が見ても全くわからないような小さな違いの鳥もいる。このような違いのある鳥を亜種として分類している。

しかし、亜種名と種名の違いについての正しい理解がな

いままに、使われていることが多いようだ。マスコミでもよく亜種名が使われている。NHKの「さわやか自然百景」でゴジュウカラを取り上げた番組があったが、シロハラゴジュウカラと、呼んでいた。一言、ゴジュウカラの亜種名だと言う注釈が欲しかった。以前、私も鳥に興味を持ちだした時、テレビでオオヒシクイが報道され、本で調べたが載っておらず、専門家に聞いたことがある。この時、それは亜種名であり、一般に使用しない呼び方である事を教えていただいた。

亜種名を注釈なく使うと、初心者をおぼろけさせるだけである。マスコミや官公庁に鳥の情報を提供する時には、正確な種名で報告するべきである。また、亜種名を使う時でも、同時に種名も掲載することで、鳥の正しい呼び方を定着させることができる。

〒053-0842 苫小牧市有珠の沢6丁目30-13

野鳥だより記事の訂正など

●第119号11ページ左段のグラフ（マガンの羽数と水中の尿酸量の関係）の縦軸がppmになっていますが、ppbの誤植でした。

●第120号表紙の鈴木正之さんの住所は札幌市豊平区西岡1条10-3-10でした。

●第120号8ページ、平成11年度決算書の支出の部の表で、決算額と予算額が入れ違っていました。

●第120号9ページ、平成12年度役員のところ、会計幹事の蒲澤鉄太郎さんと清水朋子さんが抜け落ちていました。

以上、お詫び申し上げます。



【宮島沼】 2000年10月8日(日)

マガンの越冬南下の初認日は9月中下旬頃ですが、この時期になると毎日渡来するようになり、相当数のマガンを沼やその周辺で見ることができます。静かだった沼も秋の深まりとともにハクチョウや多くのカモ類も続々と集まりはじめます。カモ類の大半は地味な非繁殖羽のため識別の難しい時期でもあります。秋はカイツブリの他にミミカイツブリ、カンムリカイツブリなどが一緒に見られることもあり、時折アオアシシギ、オグロシギ、ツルシギなどのシギ類に出会うこともあります。

集 合＝大富会館前 午前10時

交 通＝JR岩見沢駅前バスターミナル発 中央バス月形行き、大富農協前下車 徒歩約10分

【野幌森林公園】 2000年10月15日(日)

シジュウカラ、ハシブトガラ、エナガなどが混群になって森の中を移動するなかアカゲラ、ヤマゲラ、イカル、メジロなどの姿も見られ、早くも冬鳥として渡って来たツグミなどが姿を見せはじめる頃です。夏鳥の大半は既に南へ渡っていますが、渡りの途中という鳥も見かけます。森の営みも終わりに近づき、樹々の彩りの美しさと秋の深まりに触れる良い日でもあります。

集 合＝大沢口駐車場入口 午前9時

交 通＝夕鉄バス(文京台線)新札幌駅バスターミナル発「文京台西行き」大沢口公園下車 徒歩5分

【ウトナイ湖】 2000年11月12日(日)

春は北へ秋は南へと渡りをするガン・カモ類にとってこ

のウトナイ湖は中継地として大変重要な役割を果しています。この時期南の越冬地へ向かう途中のマガン、ヒシクイ、各種カモ類が羽を休めています。観察される主な種類は前記の他カワアイサ、ミコアイサ、ヨシガモ、ヒドリガモ、ホオジロガモなどで越冬のため渡って来るオジロワシや、過去にはハクガン、コウノトリ、アネハヅルが観察されたこともあります。今年はどんな鳥に出会えるのでしょうか、温かい身仕度をお忘れなく。

集 合＝ウトナイ湖畔駐車場湖畔側 9時30分

交 通＝新千歳空港発 道南バス苫小牧行き、ウトナイレイクランド下車

【野幌森林公園】 2000年12月3日(日)

雪の季節を迎え冬眠に入った森は見通しも良く、鳥の姿も見やすくなっています。越冬のため渡って来たキレンジャク、ツグミなどが良く森の梢のヤドリギの実に集まりポイントになります。コゲラ、アカゲラ、カラ類、カケスといった留鳥と冬鳥のアトリ、マヒワ、イスカなどが主な顔ぶれになり観察記録数も15種前後になります。

集 合＝大沢口駐車場入口 午前9時

【野幌森林公園を歩きましょう】

2000年10月1日(日) 11月5日(日)

集 合＝大沢口駐車場入口 午前9時

交 通＝夕鉄バス(文京台線)新札幌駅バスターミナル発「文京台西行き」大沢口公園下車 徒歩5分

☆いずれの探鳥会も余程の悪天候でない限り行います。

☆観察用具、図鑑、筆記具、昼食、雨具などをご持参下さい。

☆探鳥会の問い合わせは011-563-5158 白澤宅へ

鳥 民 だ よ り

写真展出品者は次のとおりです。

ハギマシコ、ヘラシギ	洪 谷 信 六
オオジギ、オオタカ	野 田 紘 幸
ミヤコドリ、ヤマゲラ	佐 藤 勇 勇
オオワシ	志 田 博 明
クマゲラ	後 藤 義 民
クマゲラ	石 橋 美津子
タンチョウ(2枚)	川 上 秀 幸
ミヤマホオジロ、ハヤブサ	佐 藤 ひろみ
コクガン、オグロシギとオオハシシギ	森 田 崇 司
ジュウイチ、チゴハヤブサ	小 堀 煌 治
カウウ、クマゲラ	新 城 久
シマアオジ、チュウシャクシギ	山 田 良 造
	12名、21点です。

野鳥カレンダーを販売します

今年は再生紙を使用しますので価格は

1,100円になります。

当会の山田さんの写真も掲載されています。今年は例年より少な目に印刷しますので早めに

戸津(831-8636)

小堀(591-2836)

までお申し込み下さい。

お渡しは11月のウトナイ探鳥会か12月の野幌探鳥会になります。申し込みの時に受け取る場所も明示下さい。

〔北海道野鳥愛護会〕 年会費 個人2,000円、家族3,000円(会計年度4月より)

郵便振替 02710-5-18287

〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465